

詩編 119 : 129～136

ルカによる福音書 24 : 28～35

「目が開かれて」

【前奏】

【招詞】 詩編 118 : 22～24

【祈祷】

【聖書】 詩編 119 : 129～136、ルカによる福音書 24 : 28～35

【説教】「目が開かれて」

<復活したイエスさま>

今、ルカによる福音書では、すべての人の罪を背負って、すべての人の代わりに神の裁きの苦しみを受け、十字架につけられて死なれたイエスさまが、復活なさって、弟子たちに現れて下さった。そのような場面の御言葉を聞いています。

あの、十字架で死なれたイエスさまは、復活して、生きておられる。それが、ルカによる福音書がここで証言しようとしていることです。

それはつまり、イエスさまは今も生きておられるということです。今この時も、あの、わたしたちの罪を背負って十字架で死んで下さったイエスさまは、復活して生きておられ、わたしたちに語りかけ、働きかけ、共にいて下さる、ということです。

だからこそ、今のこの時代にも、イエスさまによって救われ、イエスさまを信じている人々の群れである、この教会が存在しています。

この、イエスさまが復活し、生きておられるとの証言を、わたしたちは今日も、聖書を通して聞きたいと思うのです。

<エマオの途上で>

さて先週は、クレオパという弟子と、名前が知られていないもう一人の弟子が、二人でエルサレムを立ち去って、約 11 kmほど離れたエマオという村へ向かおうとしている。その道中での出来事が語られていました。ルカによる福音書で、復活のイエスさまとの出会いが一番最初に語られているのは、この二人の弟子です。

イエスさまが十字架につけられる前、この二人の弟子は、イエスさまの教えを聞き、癒しや奇跡の御業を目撃し、イエスさまを救い主と信じて、ずっと従ってきました。イエスさまには、選ばれた十二弟子だけでなく、他にも従ってきた大勢の弟子たちがいたのです。

そしてこの二人の弟子は、イエスさまこそ、自分たちの願いや希望を叶えて下さる救い主だと、望みをかけていました。

それなのに、信じてずっと従って来た、愛するイエスさまは、このエルサレムで、同胞のユダヤ人の指導者たちに逮捕され、ローマ帝国の極刑である十字架刑に処され、想像を絶する苦しみの中に死んでしまいました。

彼らはもはや、エルサレムに留まることは出来ませんでした。イエスさまが死んでしまったエルサレムは、今や、失望と、嘆きと、恐怖の場所となってしまったのです。

ところが、そうしてエルサレムを離れる道中、いつのまにかこの二人の弟子と一緒に歩いている人がおりました。実はそのお方こそ、復活なさったイエスさまご自身だったのです。

しかし、イエスさまが十字架で苦しんで死なれた場面を、確かに自分の目で見ている二人は、一緒に隣を歩いているお方が、復活なさったイエスさまであるなどとは、思いもありません。彼らは、自分たちの失望や、悲しみや、恐怖に、すっかり心が捕らわれてしまって、辛い現実で目が覆われてしまって、目の前で起こっている恵みの出来事に対して、目を塞がれてしまっているのです。

それでもイエスさまは、二人の弟子の歩調に合わせて一緒に歩き、彼らがエルサレムでのイエスさまの出来事を話し合っているのを聞いて、「その話は何のことですか。どんなことですか」と二人の心の思いに耳を傾けられました。

そして、二人が暗い顔をしながら、それらのいきさつをすべて話し終えると、イエスさまはこの二人に、聖書に書かれているご自分のことを説き明かし始められたのです。

聖書に書かれていることとは、神さまが遠い昔の時代から旧約聖書を通して示して来られた、すべての人を罪から救うご計画のこと。そして、そのために救い主を遣わして下さるということ。またその救い主は、苦しみを受けなければならず、その後に、栄光に入るのだ、ということなのです。

そして、そのように聖書に示されて来た、苦しみを受けてから、栄光に入る救い主こそ、十字架の苦しみを受け、復活の栄光へと至られた、イエスさまご自身である。イエスさまは、そのことを、二人の弟子に教えて下さったのです。

さて、エルサレムからエマオまでは、徒歩で約2時間半から3時間。それほど時間をかけて、ゆっくりと丁寧に、イエスさまは聖書全体にわたって、ご自分について書かれていることを説明なさいました。

ところが、二人の弟子は、イエスさまから直接、聖書の言葉を説き明かしていただくという非常に贅沢な時間をいただいたにも関わらず、それでもまだ目の前に一緒におられる方が、そのイエスさまであることに気付かないのです。

しかし、二人の心は確かに変わり始めていました。自分の失望した思いや、目の前の苦しみの現実に関心を捕らわれ、目を覆われていた二人は、だんだんと目の前で語りかけてくださる方に、心を捕らわれ始めたのです。今日はその続きの箇所からです。

### <無理に引き止めて>

さて、28節にはこうありました。「一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった」。エルサレムから出発して、だいたい11km、歩いて二時間半から三時間ほどして、三人は目的地のエマオの村に近付きました。

しかし、二人の弟子には、この同行者が、なおも先へ行こうとしているように見えました。

それで、二人の弟子は29節にあったように、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたのです。「無理に引き止める」。これは、とても強い強制を表す言葉です。

最初はイエスさまの方から来て、知らぬ間にこの二人と一緒にいて下さったのですが、今では彼らの方が、どうしてもイエスさまと離れ難くなってきたのです。この方ともっと一緒に過ごしたい。もっと親しく交わりたい。もっと御言葉を聞きたい。もっとお側にいたい。そのように、イエスさまを慕い求める心が、強く起こってきたのです。

### <食事の席で>

二人の弟子が強く無理矢理引き止めると、イエスさまはこの二人の弟子と共に泊まるため、一緒に家へと入って下さいました。

そして、30節にはこうあります。「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」。

イエスさまを宿に招き入れたのは、二人の弟子です。ですから本当は、この二人の弟子が、食事の席でもイエスさまを客人としてもてなさなければならなかったでしょう。

ところがイエスさまは、一緒に食事の席に着いた時、ご自分自らが、この食卓の主人として振る舞われたのです。イエスさまが、ご自分の食卓に、この二人の弟子を招かれたのです。そしてイエスさまは、パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになりました。

すると、31節にはこうあります。「すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」。

「すると、二人の目が開け、イエスだと分かった」。二人はこの食事の席で、やっと、遮られていた目が、開かれたのです。そして、目の前におられる方。エルサレムからずっと一緒に歩いてきて下さり、話を聞いて下さり、聖書の御言葉を教えて下さり、共に宿に入って下さり、同じ食卓について、主人としてパンを分け与えて下さった方が、間違いなく、あのイエスさまであると、はっきりと分かったのです。

パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて渡す、というのは、ユダヤ人たちが家族や仲間と食事をする時に、その食卓の主人となる人が行う仕草です。

これまで、他の弟子たちと一緒に、ずっとイエスさまに従って旅をしてきた二人は、イエスさまとご一緒の食事の席に着くことも、幾度となくあったに違いありません。

そして彼らは、イエスさまが自分たちの主人として、パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて渡して下さるお姿を、何度も何度も見てきたのです。天の父なる神さまに祝福を祈り、御言葉によって心を養い、また肉体を養うパンを与えて下さる食卓の主人、イエスさまを、彼らはずっと見てきたのです。

その見慣れたお姿が、今、目の前にありました。それは、あの、御言葉を教えて下さった方であり。あの、癒しの御業を行なって下さった方あり。あの、奇跡を行なわれた方であり。あの、食卓でパンを裂いて渡して下さった方であり。そして、あの、十字架で苦しんで死なれたお方でした。

あの、イエスさまが、今日の前にいるお方なのだ。あの十字架で死なれたイエスさまが、本当に復活して、生きて今、ここに一緒にいて下さるのだ。

この食事の席で、二人の弟子には、そのことがはっきりと分かったのです。

#### <御言葉と主の食卓で>

このように、二人の弟子の遮られた目を開いて下さったのは、イエスさまご自身でした。

まず、二人の許にやって来て出会い、共に歩き、御言葉を語りかけてくださったのは、イエスさまの方でした。聖書の説き明かしを聞いても、二人の弟子はよく分かりませんでした。しかしその時、確かに心は燃え始めていました。

二人の弟子は、32節で「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合いました。

聖書の御言葉を聞く中で、悲しみや嘆きや絶望に捕らわれていた心が解放され、熱く燃え始め、心の思いが神さまへと、イエスさまへと、向かい始めたのです。

そして、主人として食卓へ招いて下さったのもまた、イエスさまの方からでした。

二人の弟子は、イエスさまご自身がその食卓の主人となって下さり、賛美の祈りを唱え、パンを分けて下さった時。それはつまり、イエスさまが彼らを食卓へ招き、命の糧を与えて下さった時、彼らははっきりと、復活し生きておられるイエスさまが分かったのです。

わたしたちも、聖書の御言葉を聞いて心を燃やされること。また、十字架の死を成し遂げ、復活して生きておられるイエスさまが、食卓に招いて下さり、養って下さり、親しい交わりに与らせて下さることによってこそ、目を開かれ、イエスさまを知り、神さまの救いの恵みをはっきりと見つめて、信仰を持って生きていくことが出来ます。

わたしたちの信仰は、自分で分かたり、獲得したり、持ち続けたり出来るものではありません。わたしたちの目や心は、自分の思いや理想ばかりを見つめたり、あるいは現実の苦しみや困難に覆われて、簡単に遮られてしまい、すぐ何も見えなくなってしまう。

しかし、生きて働いて下さるイエスさまが語って下さる御言葉を聞くならば。イエスさまが主人となって招いて下さる食卓の席に、わたしたちが喜んでお応えし、座らせていただく

ならば。イエスさまは、わたしたちと親しく出会い、親しく交わり、わたしたちの閉ざされた目を開き、わたしたちの信仰を、恵みによって豊かに養い育てて下さるのです。

…このエマオの二人の弟子に起こった出来事は、わたしたちがイエスさまの救いの御業を信じ、今も復活して生きておられるイエスさまと出会い、この方に心から従い、救いの恵みを受け取って信仰の道を生きていくのは、聖書の御言葉の説き明かしを聞くことと、イエスさまの食卓に与ることによるのだ、ということが示されています。

そして、これらのイニシアチブ、主導権は、すべてイエスさまが取って下さるのです。

復活し、生きておられるイエスさまが、出会って下さり、共にいて下さり、語りかけて下さり、招いて下さるのでなければ。わたしたちはこの方の救いの恵みを知ること、信じることも、受け入れることも出来ないのです。

### <聖餐>

ところで、この二人の弟子が与ったイエスさまの食卓ですが、ここでのイエスさまの動作は、明らかに、イエスさまが十字架につけられる前の日、十二弟子と過越の食事を共にするために整えられた、最後の晩餐の席を思い起こさせます。

22：19にはこうありました。「それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。』食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。『この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である』」。

これは、ご自身がこれから苦しみを受け、十字架で肉を裂かれ、血を流されるのは、すべての人々の罪を贖うためなのだ、その十字架の意味を示して下さるために、イエスさまご自身が食卓を整え、主人となって、十二使徒を招いて与らせて下さった食卓でした。

これが、教会が今も受け継ぎ、守り続けている、主の聖餐の食卓です。

今回登場したクレオパともう一人の弟子は、十二弟子のメンバーではありませんでしたから、この十字架の前の夜に行なわれた最後の晩餐には、同席していませんでした。

しかし、イエスさまは、最後の晩餐で十二弟子に語られた通りに、十字架の死によってすべての人の罪の贖いを成し遂げられた後、復活して、再びご自身が食卓の主人となって、この二人の弟子を招き、救いの恵みに与らせて下さったのです。これは復活の主の食卓です。

教会の聖餐もまた、最後の晩餐で示されたように、罪の赦しを与えるイエスさまの十字架の死を告げ知らせるものであると共に。今日の聖書に示されたように、まさに復活して生きておられるイエスさまとの、親しい交わりの食卓として備えられています。

聖餐の食卓は、十字架の出来事を示すと共に、その十字架の死から復活し、生きておられるイエスさまが、主人としてその中心にいて下さり、一人一人を招いて下さり、命のパンを手渡して下さる、そのような深い、親しい交わりを与かる、恵み豊かな食卓なのです。

<見えなくなった>

さて、それから、今日の31節には、二人の弟子が、イエスさまの食卓で目が開かれ、目の前のお方が復活したイエスさまだと分かったと、「その姿は見えなくなった」とありました。

復活のイエスさまは、幽霊や、幻や、魂だけの存在なのではありません。それは次回の聖書箇所です。詳しく語られることですが、イエスさまは、朽ちない復活の体をもってよみがえられました。そして、二人の弟子が、復活を信じることが出来ない内は、そのお姿が目で見えるように、現れて下さっていました。だから、この二人の弟子は、確かにその目で、復活の体を持って生きておられるイエスさまを見た、歴史上の証人なのです。

しかし、二人の弟子は、信仰の目が開かれたなら、そのお姿が見えなくなった。それは、もはやそのお姿を肉体の目で見る必要がなくなった、ということです。

二人は、イエスさまが確かに復活し、死に打ち勝ち、罪の赦しを与えて下さり、いつも、どんなときも。はじめからも、今も、これから。永遠に、近く、共にいて下さる方を、はっきりと知ることが出来たからです。

肉体の目で見る現実よりも、はるかに確かで力強い、神さまの目に見えない恵みの現実が、自分たちを覆って下さり、支配して下さっていると、分かったからです。

イエスさまの時代から遥かに時が経った、今の時代を生きるわたしたちにとっても、復活なされたイエスさまは天に上げられて、もはやその復活なされた御体に、直接触れたり、見たりすることは出来ません。

しかし、わたしたちには今、聖霊なる神さまが遣わされて、天におられるイエスさまと、信仰によって親しく交わることが出来ます。

聖霊によって、聖書の御言葉が説き明かされます。聖霊によって、見えないけれども、天におられ、生きて共にいて下さるイエスさまが、聖餐の食卓の主人として、わたしたちに臨んで下さっていることを、知ることが出来ます。

イエスさまは、聖餐において、パンと杯という、目に見える「しるし」を与えて下さいました。わたしたちは、聖霊のお働きによって、この目に見える「しるし」を通して、目に見えない救いの恵みを信仰の目で見つめ、確かにしっかりと受け取らせていただくのです。

<エルサレムに戻る>

さて最後に、イエスさまが復活し、生きておられ、ずっと共にいて下さると知った二人の弟子は、この後どうしたのでしょうか。

33節には、時を移さず出発して、エルサレムに戻った、とあります。

エルサレムは、二人の弟子にとって、恐ろしく絶望的な事件が起こり、悲しみに暮れた場所でした。この日の朝には、一刻も早く、遠く離れたと思っていた場所でした。

しかし、復活なされたイエスさまと出会ったことによって、エルサレムは二人にとって、そのような忌まわしい場所ではなくなったのです。

エルサレムで起こった、あのイエスさまの十字架の死は、神さまの救いの実現となり、自分にも、すべての人にも、罪の赦しと、復活の約束が与えられました。自分たちが打ちのめされた絶望は、自分たちが思っていたよりももっと大きな、世界のすべての人の救いの希望へと変えられました。二人でとぼとぼと暗い顔をして歩いてきた道中は、復活のイエスさまがずっと寄り添って、耳を傾け、語りかけ、共に歩いて下さっていた、恵み豊かな道中とされました。

イエスさまは復活なされ、ずっと共にいて下さるのだと知ったことで、二人にとって、絶望に満ちていたエルサレムは、神さまが御業を行なって下さり、イエスさまが救いを実現して下さい、自分たちが恵みを味わい知らされた場所へと変えられたのです。

彼らは、エマオまでやってきた 11 km の道のりを、もう夜に差し掛かっているのに、今すぐエルサレムへ引き返そうとしています。それは、まだこの恵みを知らない仲間たちに、イエスさまは生きておられる、と一刻も早く告げたいからです。

わたしたちにとっても同じです。わたしたちの日々の生活。目の前の悩みや、苦しみや、痛みや、困難に覆われている現実。目が遮られ、ただその目の前のことや、自分の心の苦しみに捕らわれたままならば、わたしたちは暗い顔をして生きなければなりません。

しかし、生きておられる救い主イエスさまと出会ったなら、わたしたちの日々の生活は、イエスさまが共に歩んで下さる場所、救いの御業を行なって下さる場所、神さまの恵みを現わして下さい場所となるのです。

イエスさまを信じて洗礼を受けたからと言って、生活がまったく新しく変わったり、問題が気持ちよく解決するわけではないでしょう。はっきり言って、はたから見れば、現実は何も変わらないように見えるかも知れません。

でも、イエスさまに出会ったわたしたちが変えられます。わたしたちの目が、イエスさまの恵みを見つめる目に変えられます。心が燃やされ、神さまの方を向く心になります。

これからも同じ場所で、同じ生活、同じ現実を生きていくとしても、わたしたちは、わたしのために命を捨てて罪を赦して下さい、そして死に打ち勝って、復活して下さいだったイエスさまが、ずっと寄り添い、共に歩み、語りかけ、導いて下さると知っているのです。

このお方が共にいて下さるならば、わたしたちは暗い顔をせず、心燃やされ、天を見上げて、イエスさまの救いを信じて、生きていくことが出来るのです。

礼拝で御言葉を聞きながら、イエスさまの食卓に与りながら、わたしたちは目の前の現実も、自分の願いも、思いも、遥かに超えた、神さまのすばらしい救いの恵みの現実があることに目を開かれます。神さまの愛に満ちた心、力強いご支配が、目に見えなくとも、必ずいつもわたしたちの上にあると、信じる事が出来るのです。

そうしてわたしたちは、この生きておられるイエスさまを仲間に伝えるために、それぞれが生きている現実へと、生活へと、喜びと恵みの知らせを携えて出発していきます。

**【お祈り】**

天の父なる神さま

目が塞がれ、心が鈍いわたしたちです。十字架の御業を成し遂げ、復活し、ずっと一緒に歩き、語りかけ、共にいて下さる救い主を、認識できないわたしたちです。

どうか、あなたの御言葉によって、心を燃やして下さい。そして、復活し、生きておられるイエスさまの招きにお応えし、主の食卓で、命のパンに与らせ、救いの恵みを確かにし、わたしたちの信仰の目を開いて下さい。

そして、わたしたちを、生きておられるイエスさまを証しする者として遣わして下さい。

またどうか、一人でも多くの者が、御言葉を聞き、心を燃やされ、イエスさまの食卓への招きにお応えし、洗礼を受ける者とされますように。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

**【讃美歌】** 481 「救いの主イエスの」

**【信仰告白】** 使徒信条

**【献金】**

**【主の祈り】**

**【讃美歌】** 27 「父、子、聖霊の」

**【祝福】** 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン